Globalize Yourself

グローバルパーソンに聞く、その流儀

「映画」と「英語」を仕事にする映像翻訳者を育成 日本が誇るコンテンツを海外に発信していく

約 15 年前、「これからは映像翻訳の時代が来る！」と、当時まだ珍しかった映像翻訳専門のスクールを開校。その後テレビの多チャンネル化、DVD の普及、インターネット動画配信と、映像翻訳の世界は発展する一方だ。創立者である学校長の新楽直樹さんに、スクールの歩みと映像翻訳の仕事のさらなる可能性についてうかがった。

英語力で大切なのは 発音や流暢さよりも内容

映画、テレビ、DVD、インターネットの動画など、映像作品の字幕や吹き替え原稿を制作する人を、映像翻訳者と呼ぶ。約 15 年前、この映像翻訳者を専門に育成するスクールを東京で開校したのが、日本映像翻訳アカデミーの学校長、新楽直樹さんだ。「当時は映像翻訳というと、まず劇場用映画の字幕を思い浮かべる人が多かったと思います。翻訳者志望者は、ベテランに師事して認められるのを待つしかなく、プロとしてデビューする機会は非常に限られていました。しかし、1990 年代に日本はテレビの多チャンネル化を迎え、大量の映像翻訳者が必要とされることが予測されていました。『映像翻訳者を体系的に育て上げる環境を整え、翻訳者としての可能性を持つ若者や語学学習を積み重ねている人たちを大勢世に送り出したい』と、このスクールを始めたのです」。

新楽さん自身、小学校のころから英語を習い、洋楽などを通して、次第に海外に目を向けるようになっていた。大学は、青山学院大学の国際政治経済学部へ。世界で活躍する人材の育成を目指す、新楽さんが入学した年に新設されたばかりの学部だった。帰国子女や海外生活経験者が多数在籍するなか、海外旅行の経験すらなかったという新楽さんは、英語の面では苦労しながらも、志の高い同級生に囲まれて充実した学生生活を送った。「ほかの人ほど流暢に英語が話せるわけではなかったので、スピーチの授業では、推敲に推敲を重ねて入念に原稿を作り、人一倍努力して準備をしました。そのかいあって、ネイティブの先生が、同級生たちのスピーチよりも、私のものをとてもほめてくれたのを覚えています。英語を話すときに大切なのは、流暢さや発音ではない。コンテンツがしっかりしていれば高く評価してもらえるのだと、そのときに気づきました」。

卒業時、日本はまだバブル経済期にあり、有名大学の卒業生は企業から引く手あまた。新楽さんは、世界的な販売網を持つ大手家電メーカーを選んで就職した。しかし、そのとき驚いたのは、大学では常に成績がトップクラスだった女子学生が、いざ就職となると、男性社員の補助的な仕事に甘んじるようになること。「男女雇用機会均等法が施行される直前のことで、優秀な女子学生の典型的な進路は、銀行の窓口業務に就くことでした。何か違うのではないか、と思わざるを得ませんでしたね」。

出版界への転職 日本語ライティングの指導も

社会に出て２年ほど経ったとき、学生時代のアルバイト先である、雑誌や広告の制作を行う編集プロダクションから転職の誘いを受けた。元々文章を書いたり本を作ったりするクリエイティブな仕事に興味があったことから、メーカーを辞め、編集者・ライターとして再出発することに。「大手企業を辞めるとき、まったく不安がなかったわけではありませんが、当時は出版界の景気がいいときで、新しい雑誌がどんどん創刊されていました。何とかなるだろう、というくらいに思っていたんです」。小学館、講談社、マガジンハウス、日経 BP 社などの大手出版社が発行する有名雑誌の編集、取材、執筆に携わり、やがて独立して自らのプロダクションを設立。さらに、プロの編集者、ライターを育てる「編集の学校／文章の学校」の発足に参画、自ら

Globalize Yourself

グローバルパーソンに聞く、その流儀

も講師として指導に当たるようになった。「自分が仕事として文章を書くようになって思ったのですが、日本では、文章によって人に何かを伝えるメディア表現のトレーニングが、ほとんど行われていないんですね。大手出版社でも、新人は先輩と一緒に仕事をしながら見よう見まねで覚えていく。よく『教えてもらうものではない。盗んで覚えろ』などと言いますが、仕事には一定のセオリーがあるわけですから、盗むよりも教えてもらったほうが効率がいい。でも、教えるべき立場のほうも、自分の持つセオリーを定型化して伝える方法を知らないため、うまく教えることができなかったりします。そこで、社会では教えてくれないことを習うことができる学校を私たちが作った、というわけです」。新楽さんは、編集者やライターにかぎらず、社会人としてしっかりした文章を書くことの大切さを説いている。「企画書や報告書をまとめるにも、日本語がしっかりしていないと、自分の考えをうまく主張することができません。美しい文章が書けるということは、仕事をしていくうえで、非常に大切な力なのです」。

商社の友人との会話をヒントに映像翻訳スクールを立ち上げ

当時 1990 年代の半ばは、新しいメディアが注目される時代でもあった。それまでテレビと言えば地上波とわずかな BS 衛星放送チャンネルだけだったのが、現在の「スカパー！」のような CS 衛星放送の誕生で、一気に何百チャンネルもの視聴が可能になったのである。「当然、日本で制作される番組だけでは、数が足りません。そんなとき、商社に勤める友人から、海外から大量にテレビ番組を買い付けているという話を聞いたんです。『買うのはいいけれど、放送するには、日本語の字幕や吹き替えをつけなければならない。それについてどうすればいいか考えている人が、まだほとんどいないんだよ』。この話で、ピンときました。世の中には、学校で英語を学んでも、それが生かし切れていない人がたくさんいる。また、自分は今、プロとして日本語を書くための人材を育成している。映画やテレビの映像を英語から日本語に翻訳する人材がこれから多数必要とされるなら、自分が育てればいいではないか、と」。

「日本映像翻訳アカデミー」の講座は、こうして「編集の学校／文章の学校」の１つのコースとしてスタートした。当時新楽さんが考えたスクールのキャッチコピーは、「映画が好き、英語が好き」。「それまで、映画の翻訳をやっているのは、ごく限られた一部のプロだけで、映画と英語が好きな人にとって、その両方を仕事として手掛けるというのは、なかなか手の届かない夢のような仕事でした。しかし、テレビや DVD で大量の映画や番組が供給されるようになったことで、映像翻訳は努力すれば実現可能な夢になったのです」。

映像翻訳者を育てる学校はいくつか存在したが、日本映像翻訳アカデミーは、ほかにはないユニークな方針を打ち出した。その一つは、受講生が「字幕翻訳」と「吹き替え翻訳」を同時に習得できるということ。「以前は、劇場用映画は字幕、テレビ放送は吹き替えというのが一般的で、映像翻訳者は、『字幕専門』『吹き替え専門』と、ジャンルを限っていることが多かったんです。しかし、社会のニーズが多様化する中で、そんなふうに仕事を限定していても仕方がない。私は近い将来、劇場用映画に日本語の吹き替えがついたり、テレビ番組でも日本語字幕を好む人が増えるだろうと考えていました。それが現実のこととなり、当校の修了生は、そのどちらでも対応できるというわけです」。

また、同スクールが特に重要視しているのが、日本語による表現力だ。映像翻訳者を目指す人には、英語に興味のある人が多く、スクールにやってくるときにはたいてい、ある程度高い英語力が備わっている。問題は、時間や字数の制限がある中で、いかに言うべきことが伝えられるかという日本語の力だ。「『編集の学校／文章の学校』という日本語表現力を鍛える学校からスタートしているので、その点は自信がありました。翻訳に関して、実際にその世界で活躍しているプロの先生を招く一方、日本語の授業も文章のプロが行います。私も、講師の一人として授業を行っています」。

また、「職業訓練校」であるというはっきりした意識を持ち、修了生がプロとして活躍するためのサポートを積極的に行ってきたところにも、大きな特色がある。「かつて翻訳の仕事には、長年にわたる下積み生活を経てこそ一人前、というような風潮があったかと思います。仕事を頼む側としても、いきなり新人にまかせるのは不安で、新しい翻訳者が世に出にくい状況がありました。しかし、大量の映像翻訳者が必要とされるようになり、そんなことは言っていられなくなったのです。新人を世に出す術がないのであれば、我々が自分たちで送り出そうと、就業支援部門メディア・トランスレーション・センター（MTC）を設立しました。企業や映像制作会社からの仕事を MTC が受注し、試験に合格した修了生に、実際にそれを訳してもらいます。仕事の進め方でわからないところや不安なことがあれば相談に乗り、完成後は MTC が内容をチェックしてから納品します。この方法で、多くの修了生たちが翻訳者としての第一歩を踏み出せるようになり、やがて、フリーの映像翻訳者として活躍するようになったのです」。

なお、MTC のディレクターをはじめ、日本映像翻訳者のスタッフは、ほとんどが同校出身者。スクールの考え方に共鳴し、映像翻訳者を目指す人を支える仕事に励んでいる。同スクールのディレクター出身で、後にフリーの翻訳者として活躍するようになった人も数多くいるそうだ。

米ロサンゼルス校を開校 ハリウッドからも仕事を受注

受講生は着実に増え、2006 年に教室を拡張・移転。映像翻訳の仕事は、劇場用映画・テレビ・DVD に限らず、インターネット上で配信される動画、企業のプロモーション映像などますます多様化し、修了生の活躍の場も広がっていった。これらは主に、海外の映像を日本で紹介するという目的のものだったが、次に新楽さんが考えたのは、「日本のコンテンツを世界へ」ということだった。「日本のアニメなどは以前から海外で人気がありましたが、これは日本が売り込んだというより、外国のファンが見出して流行ったものです。一方韓国などは、自国の作品を海外に販売することを念頭に置いて作品作りを行い、それが大成功を収めました。日本の映像コンテンツの可能性について考えると、実はアニメ以外のジャンルについても世界的に見てレベルが高く、自信を持って海外に売り出すことができるものばかりです。ただ、それをするには、日本語を英語に翻訳できる人材をもっと育成する必要があると感じました」。

そこで、2008 年、アメリカ・ロサンゼルス校を設立。日英および英日の翻訳者を育てるとともに、ハリウッドなどから仕事を受注し、修了生に仕事の機会を提供するようになった。「日英翻訳は、ネイティブ・スピーカーが担うように思われがちですが、日本人ならではの感性を翻訳で表現するには、日本人の翻訳者ほうが有利であると思います。できあがった英文の不自然な部分のみを、ネイティブのチェッカーに直してもらえばいいのです」。2010 年には日本校にも日英映像翻訳コースを設置した。今後は英日・日英の両方でマルチに活躍できる新たなプロの育成を目指す。

最後に、映像翻訳に興味を持った人、英語力を生かして仕事をしてみたいという人に向けて、新楽さんはこうアドバイスしてをくれた。「まずは、今できることを一生懸命やってください。TOEIC のスコアアップ、海外留学など、具体的な目標があると、いっそう励みになると思います。好きなことを生き生きとやっていれば、そんなあなたと『一緒に働きたい』と思ってくれる人が必ず現れます。今の自分の力を磨くことが、結局将来のため、社会のためになるんです」。

取材／足立 恵子　写真／三浦 義昭

新楽 直樹（にいら　なおき）氏プロフィール

静岡県伊東市出身。青山学院大学国際政治経済学部国際政治学科卒業。日本ビクターに勤務した後、編集制作プロダクションに転職。独立し、自らのプロダクションを設立する傍ら、「編集の学校／文章の学校」運営に携わる。その後、日本映像翻訳アカデミーを開校、学校長を務める。

●日本映像翻訳アカデミー●

1996 年「編集の学校／文章の学校」（東京都渋谷区）の一部門としてスタート。映画、テレビ、DVD、インターネット、広告映像など、多彩な分野を扱う映像翻訳者を育成している。就業支援部門「メディア・トランスレーション・センター」を持ち、修了生をサポート。2008 年にはアメリカ・ロサンゼルス校を開校している。

http://www.jvtacademy.com/
TEL 03-3517-5002